

# 清沢満之の思想開発環

角 田 玲 子

はじめに 清沢満之きよざわまんし（文久四—明治三十六年・一八六三—

一九〇三年）の研究は、これまでかれを「精神主義」の信仰運動者としてとらえたものが多かつたが、<sup>(1)</sup>ここ数年、哲学者としての清沢満之がとくに注目されてきている。<sup>(2)</sup>西欧化する明治日本において、仏教が文献学としての近代化をとげる一方で、満之は<sup>(3)</sup>仏教の哲学的組織化を目指した思想上稀な人物であり、かれの思想の意義は、近代仏教・近代哲学研究の見地から、今後ますます重要視されることが予想される。本稿では講演「思想開発環」（明治二六・一八九三年<sup>(4)</sup>）についての検討をこころみる。この〈思想開発環〉という概念は、満之の主著『宗教哲学骸骨』（明治二五・一八九二年、以下『骸骨』）では充分に展開されておらず、これまで検討されてこなかつたが、ここにみられる環状組織は、かれの哲学構想をよく表現していると考えられる。<sup>(5)</sup>

一、思想開発環と哲学研究 講演「思想開発環」は、ま

ず満之の信仰と道理の関係についての考えを明らかにする。

これは『骸骨』においても展開されている議論であり「信仰の整調を得せしむるはすなはち、まさに道理の本領たるなり：信仰は道理によりて矯正せらるべきものなり。」<sup>(6)</sup>とされている。つまり満之は、道理すなわち合理的な思考法は、信仰と相容れないどころか信仰にとつて是非必要なものであると考える。<sup>(7)</sup>

これをふまえて講演「思想開発環」では、「この道理を明らかにするが、取りも直さず：同異に依りて思想が活動する有様なり」<sup>(8)</sup>という。道理を明らかにするという営みそのものが、「思想」<sup>(9)</sup>が段階をふんで推移し、活動するということである。さらに道理のうちでも特に哲学の特殊性について、満之はこう指摘する。

学問の根本たる哲学においても、また同異の上に思想の運行を見るの外あることなし。唯哲学は思想中のもつとも根本たるものについて論説するが故に、思想の運行あるいは開発について、その全体にわたりて思想の開発はいかなる有様のものなるやを開説し

得るに至る。<sup>(10)</sup>

このようにかれの哲学研究は、思想の動的なありようが、全体として如何なるものであり、またどのような意義があるのかということ明らかにすることを目的としている。〈思想開発環〉は徹頭徹尾、満之のいう道理によって明らかにされるものであるが、これは同時に信仰の立場とも深く関わっていることが続けて明らかにされる。

二、環状組織の意義 思想は動的なものである。これは無方向に推移するのではなく、道理によって辿ってゆけば、最終的に元に還ってそれが環状の一組織を成す。これが満之の〈思想開発環〉であるが、たとえばヘーゲルの三段論法は、その組織に三つの範疇をもち、『法華経』の十如是は十の範疇をもつ。しかし満之は、その諸範疇を「細かく分けては無数」として、無限に分割化され得るとしている。また別稿で、かれの属する浄土真宗の教法についても、同様の説明を加えている。<sup>(11)</sup>そこでは阿弥陀仏が「完円」とされ、「弧線如何に少分にも確定せば…全円を推定」し、これは真宗でいうところの不退転ということに等しいという。ある思想がどのような範疇を経るのかによって、環上の諸範疇は無数に分割され、これに応ずる宗教もそれにしたがって増加するという満之の説明は、仏法の学的探究を西欧哲学の諸学説と同等のものとして捉えるかれの考えに基づいている。

さらにかれは〈思想開発環〉を「進歩なき理ならずや」とする問いを想定して、それに答えるかたちで「思想環の価値」を説いている。当時、日本では生物進化論と社会進化論が同時に到来して、広く伝えられていた。とくにスペンサーの「進化」(evolution)という概念は、単純なものが順次複雑なものに変化することとして捉えられ、地球、生命、さらには社会の現象全般における普遍的法則としての「進化」を説くもので、これらの思想に影響をうけた進歩主義の立場によって、当時の宗教は批判される傾向があった。

おそらく進歩主義の立場から成される問いとして想定された「ただそれ循環無窮にして何の益あるや」という問いに、満之は「曰く哲学と宗教の関係是なり」と答える。「思想道理の学」である哲学は、

道理の道理を求め、範疇より範疇に亘りて、思想環を完成するに至れば、思想はここに静定して、その進歩を停め、もって信仰の歓楽を受容するに至るものなり、これすなわち宗教的安心の境界なり。<sup>(12)</sup>

というふうに、宗教的安心の境界として完結する。〈思想開発環〉の総体は「万有の実相」であり、ここからもの事をみる考え方は、満之のとらえた宗教あるいは信仰というものの成り立ちを理解するのに、たいへん助けになる。だが環状の組織化そのものは種種の範疇が交差しつつも、一貫して道理

の推移にのつとつた組織であり、道理を元として描かれた図式であることに再び注意をうながすべきであろう。また、満之みずからが「弧線如何に少分にも確定せば……」というように、各自の信仰の問題においては、それぞれの「弧線」が如何に確定し得るかということが課題となると考えられる。

おわりに 満之において、思想の開發が環状組織である意義は、まず第一にそれが哲学と宗教の総合的把握を可能とする場であるという点にある。哲学の諸説や諸宗の教法はそれぞれの範疇をもつ、あるひとつの思想に過ぎず、それを思想環上の動的活動であるにとらえる満之の立場は、哲学および仏法、さらには諸宗教をもとりこんだ、道理による思想間対話の可能性を開いている。

また同時にこれは、かれの西欧的科學主義・進歩主義への対抗論理の表明となつていてと考えられる。じつさい満之は「進化論は決して宇宙絶対唯一の真理にあらざる<sup>13)</sup>」として「万有変化の真理たる」ことを説いている。この進化論批判の論点については今後、より詳しく明らかにしてゆく必要があるであろう。

- 1 森龍吉「近代の信仰運動」『真宗史料集成』十三（同朋舎、一九七七）等を参照。
- 2 二〇〇〇年以降目立つて増えた、今村仁司氏らの諸研究があげられる。
- 3 清沢姓は一貫したもので

清沢満之の思想開發環（角 田）

はないので、ここでは以下、満之と略す。4 「思想開發環」は講演の記録であり、第一思想の開發、第二ヘーゲル氏哲学一節、第三法華經の十如是、第四宗教の基想、の四部から成る。紙片の關係上からここでは各内容についての詳論を避け、環状組織の意義についての指摘にとどめた。5 船山信一氏は『明治哲学史研究』（ミネルヴァ書房、一九五九）において、すでにこの講演の意義を指摘しているが、ヘーゲル受容という観点にとどまる。

6 『骸骨』第一章。七ページ（清沢満之全集第一巻、岩波書店、二〇〇二。以下同じ）以下引用はすべて読みやすくかなづかいを改め、句読点を加えた。7 満之における哲学と信仰、とくに哲学の役割については、氣多雅子氏「出世間性と社会倫理」（『比較思想研究』二七、二〇〇〇）、今村仁司氏「清沢満之と宗教哲学への道」（『思想』九四三、二〇〇二）を参照。8 「思想開發環」二六〇ページ（全集第二巻）9 「思想」という用語そのものについても、検討の余地がある。とくにかれの『西洋哲学史講義』（全集第五巻）における「近世哲学ヘーゲル氏」を参照。10 「思想開發環」二六〇ページ（全集第二巻）11 「真宗の教法」（明治二六・一八九三年ごろ。本稿の成立年代については諸説あるが、詳細については省略する。）二〇六ページ（全集第二巻）12 「思想開發環」二六七ページ（全集第二巻）13 「仏教と進化論」（明治二八・一八九五年）三〇八ページ（全集第三巻）

〈キーワード〉 清沢満之、思想開發環、『宗教哲学骸骨』、

「宗教と学問」、「転化論」

（お茶の水女子大学大学院）